



源氏物語系圖



源氏物語系圖

大上天皇

桐壺の巻より御位少く久しくありらば
葵をよ御位と東宮よゆつりくゆりわさる
桐壺の北門より柿巻より崩御霜月一日二
日ひた

前坊 山子奥あり

お院の北よりくらくらと葵をよまきく

北園式部の宮

藤雲よりくられを給中勢のまきく

権斎院 母

柿巻より葵のりつりよわ給藤雲をよら



攝政小方

文の衣服... 攝政小方... 女五宮

女五宮

朝敵の女院と... 女五宮... 朱萱院

朱萱院

母萱院の女... 朱萱院

桐壺の女... 女五宮... 朱萱院

六條院

母桐壺の女... 六條院

桐壺の女... 六條院... 女五宮... 朱萱院

ねと安由林をうり肉付のうん乃君の事りて
法入の事乃三月は括列法入の浦へおひじり
次の年乃三月は播磨國明石の浦へはらひ給
又の年の林出門の由はよらまきりてくれぬ
て福多く申の位はあつたより敷のやれ入納まよ
ぬ給身とけく一の事よ肉付はぬ給身まの事よ
牛車とゆりて文中より入まひし女の事よ
大は回きよ忠仁公の例めく准三右の宣旨と
下より帝の護持信のりてまきりて
思食て者のうらみまきよ下の礼とあつて
めくたふとひまきよ上と皇の事はまきりて
て院よりまきりぬ給りりまよと法入まきりて
兼光

くれ給り 白兵部心のをよまきりて
二人のつきよまきりて

堂共部御宮 いよまきりて

えハ仲の文とまきりてし女のをよ米菴院より
時共よははらまきりて肉付の人のまきりて
まきりて一人の梅のをよまきりて

兼香殿四宮

紅雲の雲乃まきりてまきりて秋風よまきりて
也そのくらまきりて

帥宮

堂の事よと法入の馬場のまきりて
まのまきりて目堂のまきりて

之孫一人孫合の事よきまづり一人

冷泉院

冷泉の御女を此正月に御養の事よきまづり
立身と云く一の事よき服二月は回きよゆり
御女を位よつを御養の事よき位よき
よゆりて御女を御養左位御女よ十のみ
こころり

一宮 母御養の事よきの女行はよき

女一宮 母御養の御養はよき女一宮よりの御

女二宮 母御養の御養はよき女二宮よりの御

宇治宮

母御養の御養はよき女御の御養はよき
御養の御養はよき

御養の御養はよき御養の御養はよき
御養の御養はよき御養の御養はよき
御養の御養はよき御養の御養はよき
御養の御養はよき御養の御養はよき

宇治大姫君 母御養の御養

御養の御養はよき御養の御養はよき
御養の御養はよき御養の御養はよき
御養の御養はよき御養の御養はよき

中君 母御養

御養の御養はよき御養の御養はよき
御養の御養はよき御養の御養はよき
御養の御養はよき御養の御養はよき

ししよふふ中若とも

手習三書

母中若若者らうまけいんをひひい
今々若若守の少方

母若若奥國守よりくくくく付若若ともお
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
若若若若若若若若若若若若若若若若若若
若若若若若若若若若若若若若若若若若若
中若若若若若若若若若若若若若若若若若若
若若若若若若若若若若若若若若若若若若
若若若若若若若若若若若若若若若若若若
若若若若若若若若若若若若若若若若若若
若若若若若若若若若若若若若若若若若若
若若若若若若若若若若若若若若若若若若
若若若若若若若若若若若若若若若若若若

あられておやういふふくくくくくくくくくく
の若ともは舟の若とも

蜻蛉式部卿宮

蜻蛉の若ともは舟の若とも
若の中らうくくくく明心の中きも様服さくせ
り

侍従

母の少方

宮若

母日

しくまう女若て後まう母のせうくく馬ひがき
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ま若ともあうくくくくくくくくくくくくく

とらせし人

一品宮 母兼准院は同女二宮是く 五よめりつり

前准院 母兼准院は同

養のまゝはつた後のいつまはみけりて林のまゝ
お院の山脈めりつりわさせ給ふまゝに
女三の宮へ

夕霧

母養の上ははたぬる女

養のまゝ八月よせしやうくせり一月母君り
とられ給ふとつりのまゝはあまの殿とし女
のまゝはえ膳してわささめりつりのつり
まの通し入るゝ養試とくも平のめり
及びりくおはははの年乃二月は文章やせり

補と同年の秋除目の法もつりつり
院行幸の時侍後もつりつりのまゝは中納
胡蝶まゝも院人から給ふまゝは宰相 中將めえ 友
の裏茶まゝは権中納 歳十九 友養のまゝは
とられ 歳十九 次の年権大納まゝこの年たられ
賜す すの白宮のそえ 中納のまゝはた つりつりの 平河のま
よなは長海めり人のまゝは

養太人將 母兼准院女三よ實は相本の権大納ま

若菜のまゝはつりつりお院つりつり
は泉院のつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつり

して宰相より中將めえ 行はせしは中納言
二月の御時よの権大納言なるおと
とありしはついで世のちひさし
振常まつる道向百家のかもろりぬり

明石中宮 母明石上の通兼備子母

身とつゝのきよは明石の備めしは
のきよは母よは早うしてまのありて桂の里よは
はしと藤原のきよは二條院へひりしりく
まのきよは藤原のきよはまのきよは
十四めくふきよとまのきよは相産の女御と
はのきよは中宮とて

右衛門將 母右内白鳥のきよは藤原のきよは中宮の御役とて

中納言 三人のりうの日おはせし人

源宰相中將 母三條上院は太長の子

えいお人か將とつひは行はのきよは三位中納言
宰相 中將めえ 冷泉院のりうの女御よは

侍從宰相 母

権姫よ白鳥の御殿よ信長よ河内侍

以中將 母

妹のよきよは藤原のきよはひさしは
の彼よはまのきよは

太夫人 のりうの日おはし人

権中將 母

右中弁

竹河のきよは正月よりやりの市もあはれはる
らの内はるうゝといはれりきりてりり人

四位少将

一 高文の口もこのは横川の信那のりく中文
の口はり人

秀人少侍

信濃信よつうきりり人

侍従

竹河乃正月は内侍のうゝといはれりきりてりり人

高文女御

うりの中ねのきよは入文

中君

母はは人相も母

今の白文
うりの中ねのきよは兵部卿の文り見の二文はかき

よ女給り母の二條文書なりりり人

六君

母は内侍のりけ春後雅光の女
一 条の文書なりりり人言書り文のきり

今上

母は吉敷帝なりりり人

明心のきよは二歳ころより身とほくりり
きよはあまのきよは梅りえのきよは二月はゆえ飛若
葉きよは位よつうきりり人

女一宮 母下臈

若葉きよは秋文

藤原宮

母下臈文家

虎西山の山守よりつり給へし時若菜の巻より
木権大納言のわらう方も如給替りせし後文音
のふね移んばよりい給へし後文音の巻より
一葉の巻よりい給へし後文音の巻より
事思ひいし給へし後文音の巻より
一人也 小野の二文

一 小内親王 母文帝の孫氏より若菜の巻より

西山よりい給へし後文音の巻より
後院よりい給へし後文音の巻より
ゆりりくわきいの日福本巻の巻より
り女房よりい給へし後文音の巻より
とねよよい給へし後文音の巻より

山よりい給へし後文音の巻より

女四宮

東宮 母明名の中文大後院の山女

い給へし後文音の巻より

二宮 母文文の巻

自若菜の巻よりい給へし後文音の巻より
院の巻よりい給へし後文音の巻より
ぬま

白兵部御宮 母若菜の巻 若宮 母若菜の巻

自若菜の巻よりい給へし後文音の巻より
上の巻よりい給へし後文音の巻より
い給へし後文音の巻より

うきそいひのうらり梅の白いとちりたる

四宮 母更衣殿

夕暮人おれりうのうらりわがもはるし目きつ乃
えふ白きこれ給一人也

三宮 母赤衣女

うらり中ねのまよは賭ちて日夕暮のらおら
しそく一車このせくゆき給一人

中務宮 母中務

うらりまよはるは極の付るまよしつり給一人

常陸宮 母更衣

夕暮のらおら賭ちてうらりわがもはるし目きつ乃
よあゆみ給一人

女一宮 母更衣女

紫の上よまのれまよはる院の南よりちり着は
まつひうらりゆき給一人おれのえ
しりてらとまよはる一人也二品宮

女二宮 母藤原女御

うらりまのまよはるうらりおれ小春も如給
その者乃高の目出さる人てまのわらり
まれのらおらうらりゆき給一人
と一品の文乃わのまよはる一人也
ひ給一人

藤原 母赤衣女

秋女中宮 母赤衣女

養の事しは女はよき給は年十四みどほし
よ位ゆつりよらまきわくらのあせ給
後合よ源氏のいひまきゆりて梅童
とあしこし女は中女よき給は法よ重なる后
美よあしせ給は東院まわらひじこめ
秋のをとらよき給一人こ

● 東兵部卿宮

宰相中ね 母是女院美

梅之の事よ四位侍従とあし行海まよ三位中
ね同きよ宰相中ねあえ

侍従

梅之の事よ東院よりあえのいひまき

身中よりあつたれ一人

一 女官 母是相上發馬のやの女

らくえうせ給一後母よりあつて梅の事
は梅寮人納言とあし一はあつてあつて
あつて一人あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

● 先帝

式部卿宮母

えいあつてあつてあつてあつてあつてあつて
薄雲女院 母是相上發馬のやの女
相童の文家よりあつて後中門の甲斐は朝よりあつて
とあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつたあつた人といひは内侍のときも夢一
て相違のきよなりけりけり藤原のきよ
あきつの中を治りたりと云ふ中治のきよなり
河よりあつたよなりけり冷泉院より
と治りおのきよなりと云ふ中治のきよなり
中治よりと治りけりけり後醍醐天皇
二月よりけりけりけり道よりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけり

源氏宮

かきとらへるる下藤のきよ

あつたあつたのきよなりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけり

源中納言

あつたあつた

あつたあつたのきよなりけりけりけり

あつたあつたのきよなりけりけりけり

中将

侍従

氏部大捕

あつたあつたのきよなりけりけりけり
あつたあつたのきよなりけりけりけり
あつたあつたのきよなりけりけりけり

兵衛督

あつたあつた

の由申よとくれ給ふなりしをりうとてお茶也
まのせとらあり

・ 攝政大臣大納言 引入のやうにあり

相違の事よなをたして保はのううりせし人
ととばうはまよおぬるまよとく 攝政大臣 兼三元
いらしの人也 藤原のまよに正月ようせを 藤原の
御ちうとと秀方なるのまをりしなり

教仕大臣大納言 母上天皇下屋のり 妹三女也

相違の事よ藤原のまよをたして保はのううりせし人
のまよ乃まよとて四位下 兼三 藤原のまよとて三位中
おとゆ乃まよとて宰相の中おとらとてとてりて身と
はくし一のまよと藤原中納言藤原のまよと権大納言也

とてまよをたおとて保はのまよとて女よ内大臣めく藤原の
まよとて世の中りハハとてとてりて 藤原 藤原乃まよ
よとて大臣若菜まよとて大臣表とてなりてとてり
おとせ給よまよとてり 藤原 藤原のまよとてり藤原の
こととてとて保はのまよとて二条のまよとてとてり

左中弁

藤原 藤原のまよとてり藤原のまよとてり藤原のまよとてり

藤原のまよ

権中納言

藤原 藤原のまよとてり藤原のまよとてり藤原のまよとてり

ゆと二人藤原之藤原のまよとてり藤原のまよとてり
目りしの中りしつとてり藤原のまよとてり藤原の
まよとてり二人のまよとてり

藤原上 母りしの中りしとてり

相違せよ源氏よわひて夢のきよは夕方のとわと
くく行りゆくこれ始八月十余日源氏十二元服要書
上十六り合始

柏木権大納言 母三条左大臣益君 父りつらりの子

し女のおよはたを女将胡蝶のきよの中ねよまやぶら
大よ中ねのおきよは参議をきよのきよを
中納言 カミ 二ふのまのきよをきよを
ぶりまらに柏木のきよは病のうらにぬきりか
の大納言よなりて行りくし世終のぬきりの中ね
とつひ

紅梅お大長 母徳子

柿よきよを殿とせりしつら物言に弁女お若
榮よ以弁紅梅は梅屋大納言とせり行はよた
る片よなりてたをうねときよは掩顔のきよは
ぶの目くくいふくきよはきよは一人也

頭中将

藤原京殿女御 母お少方の殿

紅梅のきよは母のきよはきよはきよはきよは
殿の女御とせり

中君 母女御よゆか

紅梅のきよはきよはきよはきよはきよは
お梅のきよはきよはきよはきよは

大捕 母扶佐の娘

紅梅のきよはきよはきよはきよはきよは

文やしゆーりま

コキ
弘徽殿女御 母を為す日

身とづくーのきよ十二のあははよまつり給治家

院にせえ乃は母に結合と給ー時た

夕芳大納言 母梅家大納言の女

ゆさうくーりくーれ三條女よわーあつれて文

書の中くーもよゆひのく給ささくれりれん

しひきりあやま井の馬も致しんわくす

くーんやあま裏糸のきよよゆくー宰相中納言

ゆきー時父大納言ゆしあきまよ

太皇太后

藤宰相

ゆー二人夕芳のゆーのよきーきんまうーりそめ給

ーゆきうあきくーひー人くお方ゆーり

左大臣

梅本権大納言くーりふゆー時二条の女乃ゆ

るくーりゆれー人

中将

菊人少将

きよきよふゆゆーり梅本権大納言の命若とゆ

ゆー二人夕芳のゆーのきよぶーりあきくー殿とゆ

ー時お具ー人くゆらのとゆーりゆき

のよゆ一條女よゆひ給ー時くーりゆき

のきくゆゆあきゆれゆひゆき

ゆきゆゆゆー人

玉幣

田中くめのとれか武よりして花きくくくく年して
のらむくくくのをよりまくのりく源氏くくたこ
つねくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
時じくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

加中み 十ハカリノ

若の裏をふよせらふよせらふくくくくくくくく

を江若

母くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

● 二條大政大臣

朱雀院のくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

大納言

頭弁母

お院うたねを病なく後深成のよね世の中いかに
くゆりされきりば雲林院よ二三日よりりてま
えのゆりまのりまのり白虹日とつてぬ
をりし備せり人あり

藤原京殿女御母

朱雀院の位の時女御は弁母の母

右中弁母

四位女將母

よこ人深成中將母がら月夜のはひりりしぬ
のねまらぬまのりておの陣よ人どつきて

お院うたねを病なく後深成のよね世の中いかに
くゆりされきりば雲林院よ二三日よりりてま
えのゆりまのりまのり白虹日とつてぬ
をりし備せり人あり

お人女將

らゆりぐの者のまら病は深成のはひりりしぬ
まづりくむ一人のむらむらばははらりそこ
つるなり一人の病よむらむらりそこ
いつまの病よ守りむらむらの男

弘徽殿太后母

美のきよ后よりまづりまのりまのり
日まよむらむら病よむらむらりそこ
まのり一人

御高水方

とも今上の御母也

兼香殿女御

今上御母兼香院の御母がせまきうりし御母はなごり

从中将 母

大原院御母大原とあしし一御母の御母はなごり
さき中御母ししはあひのまきりて御母の御母はなごり
ねよあくやまゆりつらさよつさくくもあつ
どよらつておし一曉たてぶとこの御母はなごり
あそしえきりし一人也

大原院
女御

大原院位の御母の女御はなごり

藤中御母 母さきあきの一女

竹河の御母はなごりし御母の御母はなごり
一人

大原院 母さきあきの御母

あまれしよしりし御母の御母はなごり
さきこの人えの中御母竹河はなごり

大原院 母さきあきの御母

あましりし御母の御母はなごり
大原院

从中将 母

えの御母竹河はなごり

真木御母 母中御母

若菜あまの御母の御母はなごり

つら紅梅ちまたの梅屋ふつとゆきしりしり
ふひそめ終てゆきめあまふらうたたむらう
の内宿りこころいふそめ終てはななくおの方よ
具してあやぐらの文よまこり終て時この如君
終てはなれとまふらふとこころわやう一人し

次泉院女御 母まうくの内のこころ

竹川乃きよは月よ院へまのりあふ二女二女の
四母々等のたは乃ゆき宰相中将あは人が将とま
えしはなつてま一人し

内宿のこころ 母日

竹のきよは女の内宿りこころのゆつりまえて内宿
のこころあやぐて内宿り終て竹川乃中あはりの

たまた

藤壘女御

今とままの四時よりまのりあつりしりあつり
女御よきとまなれまのりて世の中まはなはく
あやされまのり女御あまのりこころあつり
やうりまよらせまあや行はよこころあつり

大蔵

修理大史

つと二人女御の一般よあつり

たまた

入道場と守

えい進忠中将よりきりうらねおとよりて徳大寺
よかりし一宿をそくおく海のかんしやせう
おがくまれのまよるうらねおとよりてきり
てうらねおとよりて明石浦よりきりしきり
よきり。源氏よりおはるの浦よりきりしきり
のつきよせうらねおとよりてきりしきり
ひとめのまよるうらねおとよりてきりしきり
せれおとよりてきりしきり。世よのうらねおと
りの浦よりきりしきり。よきりしきり。入
道よりきりしきり。よきりしきり。よきりしきり

明石上 母れ中勢、えのじきり

源氏の浦よりきりしきり。よきりしきり。よきりしきり

て中えをうらねおとよりてきりしきり。よきりしきり
へのかりてきりしきり。よきりしきり。よきりしきり
よきりしきり。よきりしきり。よきりしきり

按察大納言

源氏の母よりきりしきり。よきりしきり。よきりしきり
のかりしきり

洞壘、えの

い息所、えの、日事、や、世別

右院位の内付るえの、えの、源氏よりきりしきり
よきりしきり。よきりしきり。よきりしきり
よきりしきり。よきりしきり。よきりしきり
よきりしきり。よきりしきり。よきりしきり
よきりしきり。よきりしきり。よきりしきり

雲林院律師母

内りこ給一平唐揚妻此のぬりせり
源氏雲林院は統わくせせしは法文と云
一人源氏の西母と云

大后

六條御息所

十六ゆく茶坊よまがりて秋ぬ中女と云り
十九ゆくか女よと云れまがりて中女と云り
の弁文よ異して作勝へく入り給ふ一棟妻
よ見えたり身とづり一のきよ秋文女と云
世給ふよ入りてふざり給ふ一給ふは七八日
まてしうせ給ふ源氏の西一人は侍中と云

わりのしるし一一人のしるしのしるし
しるししるししるししるししるし

大后

宇治女小方

宇治女二人のしるしをすはるは昔の女
うへじうしうしうしうしうしうしうし

又

紀伊守 大后妻の孫

小野のしるしと云置人おつしるし
くくおはめくくおはめくくおはめ
しるししるししるししるししるし

常陸守小方

宇治の文也方のうの者の中納の志とてさう
ひーがゆ方をせ給く後何くまうしひ給き
あやまおの君とせり文の志とてさう
されとらさ給よるく給きねる常陸守おが
てみえわさうさうり

左中弁

宇治ゆ方母くこのり

推く事の中納よ宇治の娘志とてさう
母くこのりさうり

弁ら

母柏木志也、皆のうけと女之志の小侍従とひと
け腕せうりうちおよ昔の中納ひさうせ
人く宇治のち娘志とてさう後何くまうと

さうひりえさうり

●お右志也皆 中納とてさうまうり

右志也

志也の志とてさう中納の志とてさう
の方さうの志とてさうとてさう
くさうさうさうさうさうさう
かあがさうさうの志とてさう
さうさうさうさうさうさう
てさうさうさうさうさう
の志とてさうさうさう

空探石

らの中納とてさう後何くまうと

寺はぬくくりにしはあはれに
のまのまはぬくくりにしはあはれ
くはぬくくりにしはあはれ
あはれぬくくりにしはあはれ
くはぬくくりにしはあはれ
あはれぬくくりにしはあはれ
くはぬくくりにしはあはれ
あはれぬくくりにしはあはれ
くはぬくくりにしはあはれ

常陸

蓮生女君

あはれぬくくりにしはあはれ
くはぬくくりにしはあはれ
あはれぬくくりにしはあはれ
くはぬくくりにしはあはれ
あはれぬくくりにしはあはれ

末福花のまのまはぬくくりにしはあはれ
くはぬくくりにしはあはれ
あはれぬくくりにしはあはれ
くはぬくくりにしはあはれ
あはれぬくくりにしはあはれ

東院よもくりにしはあはれ
くはぬくくりにしはあはれ
あはれぬくくりにしはあはれ
くはぬくくりにしはあはれ
あはれぬくくりにしはあはれ

とくくりにしはあはれ

禅師

源氏明名の海よりぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬき

おとす

このとす梅うえよんてまよる

秘蔵京殿女御

梅うえよんてまよる

梅家大納言

夕暮のとすぬきぬき

五等山君

し女をよみよの舞姫よまつりてわづくし
まりくさうぬがう腹のひとめく

恭儀藤原惟光

母大式部

えい^モちまといひよはるのまてよ西^アる浦に女よ
侍のこめくちまをまのけり梅^ウえよまね
よかろほ氏のほをまねがうしんこ

長流依

し女よ童^ウめく船^ユ上^ユゆるされく夕^ア方の音^ウたふ
のま^ウとあし^ウの妹^ウのま^ウ乃^ウまの^ウま^ウん^ウ
い^ウて^ウま^ウつ^ウい^ウは^ウつ^ウい^ウ梅^ウえよま^ウ

依^ウめ^ウく^ウみ^ウが^ウい^ウら^ウく^ウつ^ウま^ウれ^ウり^ウ董^ウか
つ^ウく^ウま^ウり^ウく^ウ

藤内侍のまけ

ほ氏のゆ^ウめ^ウま^ウを^ウり^ウ給^ウし^ウの^ウ舞^ウ姫^ウま^ウ
芳^ウと^ウの^ウま^ウい^ウん^ウま^ウの^ウま^ウの^ウま^ウり^ウ也^ウは^ウよ
かり^ウあ^ウま^ウま^ウり^ウ也^ウは^ウの^ウま^ウり^ウよ^ウ

山河園楽

女^ウ息^ウよ^ウ惟^ウ光^ウが^ウ兄^ウの^ウり^ウく^ウり^ウ比^ウ叡^ウ山^ウの^ウ法^ウ華^ウ
ま^ウめ^ウく^ウ夕^ウの^ウま^ウ九^ウ日^ウの^ウ法^ウ華^ウ
一^ウく^ウ

少将命女

母惟光

夕^ウ敷^ウの^ウま^ウり^ウく^ウめ^ウく^ウり^ウの^ウま^ウり^ウ

比治の御成敗...
とらねの舎敷...
しん

冬河守書 母日

人并居...
...

系譜文内

明石乳母 母は院さま

らの事おはるるりしん...
後く...
て人の...
く明石の...
...

はら...
よ...
...

三位中将

夕歌上 母

致仕...
...
...
...
...
...

宰相 夕歌の上の母

宰相書

其乃きよりのむらうの肉肉乃うこれ女房を
院よりとまはれし人々の世よりさう
せられし人

● 大宰大貳

源氏にその浦よりさうと結しは執事より
なりては女房より人々

執事守

昔源氏のゆきこふく苑よりさうてさう結
りきりらうの人武乃はよはたの浦より
しんく

五世の君

昔源氏のみは結し人もその人武よりさうては

うへらうりらうさう海のきよのひらに女房
よきつひては

若菜のきよは苑人のさうさう

● 前播守

源義清

若菜のきよは苑人のさうさうさう結し
まよ源が納め身とつきのきよは執事
位名柄の目赤 しきよ中弁近江守とさう
名とさうり 源氏にいつしうりつひて義清惟
とさうさうさうのうきよは果してさうさう
きよの明名のうきよはさうさうしんくも源氏
のきよはさうさうのうきよはさうさう明名の入道乃

しとめの事物後りりてふかかるといふ

五前君

し女巻よりあまのりていふあまのりていふ
江をくく作てしあまのり

伊予守

お院くられさせ給く後書陸よぬくくく
屋よのりていふせぬ空際の子のけしこ

紀伊守

源氏中侍中ほの由方よぶ人のあまのりていふ
のまよは内守よらるつね長といふあまのりていふ
翁人たよお監

源氏の大おさい院の由緒よはくまつり給
時一負^{イナ}ま^イく^イり^イ一人也大おはるの浦へおと
じと給一^イ時^イま^イく^イび^イを^イり^イて^イ殿^イ上^イの^イ礼^イを^イ
け^イら^イが^イく^イく^イせ^イ給^イく^イ身^イと^イけ^イく^イ一^イは^イ翁
人^イゆ^イを^イい^イの^イせ^イう^イせ^イる^イく^イり^イ松^イ風^イよ^イく^イふ
つと給り

翁人お將妻 西の由方とらせこのまよま

空際の子よいま^イじ^イと^イめ^イ紀^イ伊^イ守^イが^イく^イく^イの^イ腹^イの^イ
妹^イ源^イ氏^イ空^イ際^イの^イと^イわ^イけ^イの^イお^イ人^イが^イく^イく^イ一^イお^イを^イ
給^イ一人^イ也^イを^イ後^イ形^イの^イお^イと^イし^イを^イり^イて^イい^イ家^イ
の^イく^イく^イと^イら^イわ^イく^イく^イお^イ人^イの^イ翁^イ人^イお^イ
乃^イめ^イよ^イや^イり

孝隆の

えいみらの園くそ後りい孝隆のよなりは
の若れきくち中若の若とゆのくし人の男に

若人式部丞

えんの若のくくそ若の若よ田の若使かて白
きつえいもつりくつりし人

若人たを若監

母直若の若よ田若大若の若れゆりよ若が
しとゆくくよ若くく若人たをよ若う

童

母直若の若もつりくく若くくつりつりつり
の若お若れはむじりくく若くく若くく若文づ

ひせし人

灌波若月若

源少納言若

若と二人今の若方若腹よ若う

少将小方

若直若の若か

いじこのか若の若の大若の子しりりえいお若
の若よわ若せんとく若と若若守よい若くじ
と若とく若て若若くく若若く若若く若若く
若若若れ若れ若れ若れ若れ若れ若れ若れ若れ

中宮若

明中若の若若若り

●太宰少貳

おろろの君れ乳母のゆゑ

姫君四よお給とくうくしはくくくくくく
てこのおらんとせー時中もさう病よまうくひて
うせぬおろろくまうくくのおまよまうくくく
年姫君十さうりお給とくんとてさう
とくれーくくくくくくくくくく
さうくくくくくくくくくく

●後妃 太常也

りくくくく後年へくゆいぐんとくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく
昔の共藤が也

次郎

三郎

ひくくくくくくくくくくくくくくく
よくれおまのわかんのくくくくくく
よまきり肥後國のふ吏監よまうくく
のまきんくくくくくくくく
姉おまも
られくくくくくくくくくく

共部君

みれん昔のわてうとひさし娘をようとく
のちり

● 兵部大輔 こうべいしん

「大輔令婦 母なる乳母

母の女房とくまのじよんくは源氏の由き
まのゆりまふまのこころをわらわ
とておこしうまうまのこころの
まじしついでにわらわのこころ
とてこころをきつては娘をよし
のまらまらとてわらわ

● 按察大納言

女 母の山僧の妹は若菜をよるこころ
紫と母早世せし人なり

紫の上乃母らくの人納言くらまは
しつと娘しやどよすめくちく
娘しういたく後家石をりあつ
はまらなまおびううい娘し
おの方やまううい思つんまら

● 大后

為康系殿女御 お院の女御

花教屋上

仙院の山内女洲の四方めく徳成てそめ給
くそのくらの徳院乃東の四方とすゆた
男のやぶれやーさひくくしゆくくしゆ
ひきよは東院よりつり給

不入系圖人々

中勢宮

父秀大相宰相中ねとす一町むらめ姫君とす
さとり一人梅えよるくさり

上野宮

美大相中細云とす一町女二文の山内中ねとす
つせー田中勢文と殿よの一人

梅枝お大相

まま西元服の時女御さくとせよ明石の姫君と
り給とさよさりておひとまり一人

行はれた大相

又秀のやぶれ乃西の宰相中ね飛人かおとす
おひとまり給一人

お大相

お家の妻乃日原氏青海波舞給一人は西元
菊とかりさくさくはさ一人一人

お大相

若菜の妻よさひひよりりておお一人なり
一人

大納言

まろみれとよ朱雀院の勅別當

李二

右^有大納言

宇治の細代兄の附也よりまろみれ一人

大納言

白き初め初めよりまろみれ一人宇治の御中より
出陣よりまろみれ一人

中納言

それと宇治へまろみれ一人

不審

右侍

比三人和歌などよ極意より一人えんよりまろみれ
これよりまろみれ一人

参議

秋多女御入内よりまろみれ一人

兵衛

源氏松尾のまろみれ松の御極の日車よりまろみれ
将とのまろみれ一人

氏部

又芳のまろみれ服の後わさるまろみれ一人
と知れよ一人

太宰

えへ受領まろみれよ太宰よりまろみれ一人
まろみれ一人

左中弁

朱雀院の女とえん乃乳母のまろみれ一人
云奈院の院のまろみれ一人

左大弁

相違まろみれ源氏のまろみれ一人
一人年へく松尾の極のまろみれ一人
人まろみれ一人とまろみれ一人

左中弁

又芳のまろみれ服の後わさるまろみれ一人
まろみれ一人

右中弁

極のまろみれ日車裏れ出つひまろみれ一人
まろみれ一人

右中將

同まろみれ車よのまろみれ一人
松尾のまろみれ一人

源中将

一筋の持家の者よ時々おひし人

源理太史

源内約時々おひし人

常陸女舞出

昔のちねるふととりし床屋よ少将少く舞出る
いさ隆女いさ屋のまねせとこたりなを中ねとわり

右を中将

鎌合よ米雀院よりおき女所のいりて人後よと
ま〜〜〜い〜い

中ね亮

女二文の山書きよ中女より山文せし人

左馬次

ち上天皇の山位乃何殿上人西東の地居乃おさ
めの物と

馬頭

りをうおれえ乃若のま〜〜〜おせしと

式部大補

文章博士

つと二人夕書入ま何作文よいし人文章
博士ハ題者よりと

大内記

夕書の中いぶ乃青れ山師う〜〜とけ〜〜と物と
とりり

氏部大補

〜〜の中書れえのすれとりのよ田〜〜せし人

苑令式

在院位の山師乃六位文章生也。多和物語乃合
かり

苑令清門

野の初幸乃目物史少く源氏の中〜〜のり〜
まりり〜人

氏部丞

源氏乃家令かり

馬助

野〜〜のつ〜〜れ日々書れ中〜〜中ね〜〜書え〜〜時
〜〜書ゆ〜〜中〜〜人〜〜文書〜〜人也

筑前守

大浦命ぬきまらりた馬つら乳母ぐやう

和泉前守

おりら月東の内侍の女房中納言の志ぐせうとあ
業のよまごころ

左衛門

夕暮れおぬ家の人小野へおまじりし人

左衛門

くまやとこりつまー人

右大臣殿

梅家入納言 式のなま

左京園人なりり
左京のまよあり

大藏大輔

業おぬの家人お山よりおまじり人自まのまらり
おやうと舟のまよとこり

紀伊守

是もおぬの家人おののたのゆいお智の志小おらり
とじはおぬの地りおひらきおまじりし人

時方

自まの家人おぬの志りし人おはまよ
おせり人

因幡守

おぬーまの人お方おらりし舟の志ぐて川む
くいよおらりし家か

大藏監

筑業おぬの肥後國の人おらりし舟
まよとこり

小山僧都

お山の石お見世志の上の母のまら

横川僧都

高雲の女院おらりしこのおらり女院御お家乃日
おぐらりしおらりし人

小野僧都

小野のおらりしおらりしおの志るし人
一人横川の僧都とよ

護持僧都

冷泉院の御持僧人志まらり昔の事とこり
たつりし人志勢僧都とあり

宇治律師

宇治文の内侍於泉院よりついで内侍とて人なる
橋姫よりついで律師

水山上人

源氏中将のよりついで上人

御導師

幼のよりついで六條院の内侍名の導師

妙法寺別當

ちよとやうりきうんらうのよりついでこのよりついで
この人よりついで

一條清息所

不審
文長なるの皇女也朱雀院位の内侍乃女御落葉
の文乃母夕方よりついで

夕貞姫君

三位中将女夕貞君よりついで

桐壺内侍

三代の内侍よりついで

平内侍

侍従内侍 二人後合の時梅壺の内侍より一人

源内侍

右院の内侍の内侍のよりついで
三人年へついでよりついで

文女別當

六條女文のよりついで一人

大江

後合の時よりついで

去文宣官

今上去文乃時の宣官内侍のよりついで

女院宣官

朝貞乃文のよりついで源氏よりついで
治一人

勅員命女

桐壺よりついで
久き一人

弁内侍

鎌倉の侍方本ノミのワハシ

王命姫

高麗の女院の女房源氏の由公より

中将命姫

兵衛命姫 以上二人鎌倉の時よりその由方

少将命姫

鎌倉の時梅壺の由方は越の由時ひとり一人

相臺の女母

明入道不審の女母

東屋君

昔の中将の君より其後かの書

小宰相君

意大なる思人 眠る二ふの女房

按察君

同明のつふ女房

弁君

同女房

中納言君

養上の女房源氏よりして其後その由の別は時より
その由の思ひより

中務君

同女房源氏にも其後その由は其の中なる女房より
比くその由の思ひより

中将君

その由の女房

少輔君

同女房源氏の君も其の由の由乃時とけたり
いつれ一人今の幸臣アの由より

中将君

其後その由の女房

少将君

明中交の由めりし文内女

右近

夕由の女房女君をせし後保成の由方よゆこ

少納言君

紫上の由めゆきと御のきよ物ひかきし人

宰相君

夕勢の太政大臣ゆきと養父をせし保成よあゝ母を
院の由方ゆきと人殿

中務君

二女房よゆきと後よ紫上の由方よゆきと人

弁君

紫上の女房少納言が女三日のよゆきとらる雅老が
ゆきとゆきとゆきと人

中将君

ゆきと紫上の女房ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと
ゆきとの日ひゆきとゆきとゆきとゆきとのゆきと
ゆきとゆきとゆきと人

少将君

未摘の女房ゆきと人

侍臣

日

少将君

ゆきと女房桂の里ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと
て四車よゆきと人ゆきとゆきとのきよは保成ゆきと
ゆきとゆきとの別ゆきとゆきとゆきとゆきと人

侍臣

女三女房ゆきとゆきとゆきと

侍臣

ゆきとゆきと女房

宰相君

ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと女房

大吏君

ゆきとゆきとゆきとゆきと人

中納言君

おれ一女房近江志のせり書一人

弁君

むらぐらうの女房

小侍従

二不交女房栢木のふらり乳まき

木上君

初まぐらうおねの女房ゆりのふらりまきまき
しよどのぐらう女房ゆりのまきまき一人

中将君

日

按察君

二不交女房ゆりゆりゆり一人

小少将君

一不交の女房人まきまきまき一人
のうらぐらうと

右近君

同女房

中納言君

紫上の女房ゆりまき後山前ゆりゆりゆり中納言
とねぐらう一人

大吏君

おらぐらうの姫君ゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりこの女房

馴云ナレキ

同まげぐらう

中将君

同女房おれ人がねぐらう一人

按察君

ゆりゆりゆりの女房ゆりゆりゆりゆりゆりゆり
一人

大吏君

宇治の中吏の女房おれ二不交へゆりゆり
一人

右近君

同女房と稱う女事屋の君中の君乃四郎といふありて
一日日とのいひて候し一ふ人等々をいふより候合は
よきつり合ひて候し一いひて候し一いひて候し

大捕君

宇治の中君の女房二条院よむいひて候し一いひて候し

少将君

同女房

右近

うまの女房

右近の女房

侍従

同女房如君三條のいひて候し一いひて候し一いひて候し
へがしておしせし中車乃をいひて候し一いひて候し一いひて候し
て候し一いひて候し一いひて候し

弁御侍

アモト

明石の二宮の女房といひて候し一いひて候し

中将君

同女房名といひて候し一いひて候し

あてふ

蓑の上乃をいひて候し一いひて候し一いひて候し
うきをいひて候し一いひて候し一いひて候し

宰相君

中将君よむいひて候し

信濃後家石

手習のいひて候し一いひて候し一いひて候し
乃をいひて候し

小野大臣

信濃弁といひて候し

大裁女官

末橋の君乃母といひて候し一いひて候し一いひて候し
人をいひて候し一いひて候し

明石石

うきの中君の女房といひて候し一いひて候し一いひて候し
をいひて候し一いひて候し

少貳書

かうての君乃りて候し

大貳乳母

源氏の四女のと惟光女御令ぬるどが母

左衛門乳母

同四女のと大貳乃母のと兼光女御令ぬるどが母
院前守が母よりなりてらざらる備令ぬが母

大貳乳母

三條の上四女のととのとどり母より三條とてせむ
りい一人

宰相乳母

夕ざりのもとどり母のと

二もき

とのとら乃女房

侍従

日

無名人

一人

東の御所よ馬場の指すひとり一人

一人

同巻御所よ相と引一人

一人

同巻御所よ武ががかりひとり物とのじとめのとて御所の
さしやがかり一人

一人

赤坂よりりの西のむらびあつとのはくるとの腕とあわが
けりしておとがささといひつゝいひ入一人

一人

源氏のむらりり里へかきせしる中川のささりりあてえ
とていひつゝいひ推定していひせしる一人

一人

あざり木のあ乃あよまておわれりつゝいひあまのつと
り一人

三人
一人
一人
一人

胡蝶乃きりまの山とよりあよのりて弁に
てまうり一人

あつみの山とよめ三雨のたわもひよなまゆり
ていのがねとまうりてまうり一人

宇治の中々の女房早藤よきまのまうり一人
四車よせうよ太鼓のきうりてまうり一人

よまをれやうごひ一人一人
まうりよ一人あつみの山とよめまうり一人

あまをきよき深守女房をかおよ媒まうり一人

卷之次身

一 桐壺
源氏誕生至十二卷
十三四六卷又えり

二 帚木
十六卷又

三 空蝉
同又

夕顔
同自又
至十月

四 紅紫
自十七卷三月
至冬

末摘花
十七卷
十八日

五 葵
自十一至十二卷九卷
不足卷上十四卷三卷事立

み花宴
十九

六 花教置
廿四又

七 柊
九次磨
廿六廿六

七 明石
廿六三月廿七
改系七月

八 土御門
廿七廿八

八 蓮生
十七又

九 園屋
廿八九月
廿九又

十二 結合 此

十五 落雲 此

十六 少女 此二 此四

初音 此六月

螢 日夏

篝火 日秋

行幸 此十二月 此七月

栞任 此九月

十八 梅枝 此九月

十三 松風 日

十五 槿 此一

十七 玉鬘 此八

胡蝶 日三四月

常夏 日六月

野分 日八月

勝袴 此七八 九月

十九 勝裏紫 此九月 十月

廿 若菜上 此九月 此四十一

廿一 柏木 四十八

鈴虫 此十

廿四 御法 此十一月 此秋

廿六 雲隱

紅梅 此十九

宇治十帖

一 橘娘

三 總角

司下

廿二 横笛 此十九

廿三 夕霧 此八月

廿六 幻 此十二月

廿七 白雲 此十一月 此十四

竹河 此十九

二 推車

四 早蕨

六 宿木

六 東屋

七 浮舟

八 蜻蛉

九 平習

十 夢浮橋

清少納言作加卷く名

橘人

菓守

八指

さーく

花見

暖帳野の上下

古物語名

伊勢

竹取

うつら

後衣

作者大貳三位
紫式部女也

正三位

隠蓑

岩屋

ゆらぐか

任吉

濱松

こまろ

清松孝子

あゝ母の少将物語

清松孝子

唐守

藤姑射

大和

左原滋妻作或ハ
花山院製作云々

源氏教奉事

行成心

自筆

今世不傳

源光行

ハ八本とて授合本云々

冷泉中納言朝隆本

堀川右大臣後之房本

号黄表紙

従一位藤子本

南家相傳

古河門左大臣
号赤松如政取

法性寺園白女

唐紙小字子
号尚侍殿本

八條三位後成仁本

京極中納言定家本 号青表紙

一 源氏の寛弘始一條院世代より出現して世より知らるる
事 康和の末堀川院近代也

一 水原抄 大監物光行作也

一 紫式部の鷹司殿宮女也 相繼て上東門院の御作と

一 式部墓所の左雲林院白毫寺南也

一 式部檀那院贈僧正の許可と云て天台一心三觀の血

跡入り

一 河海の善成公の丹波氏忠守朝長の傳人

一 紫明抄十卷 光行子
親行法名孝孫

村上皇女 大納院安子 選り
母九条右丞相女

上東門院 八十七景
法名清淨美 古堂園白女 後一条後朱雀
二代國母

宇多天皇 仁和一
寛平九

醍醐天皇 昌泰三
延喜九二

朱雀院 三條朱雀也号後院
延長八 兼平七 天慶九

村上天皇 天曆十 天徳四 仁和三 康保七

冷泉院

安和二

此一冊依桂苑五不望心家本加書寫者也

天文十九年六月日

批葦宋央判

同廿七日一授合

愚案此系圖之人名及註之小書等不審
之事不少也蓋以河內本青表紙等之
本有差異之故乎且又展轉書寫之誤
乎雖然今任所持之一本而強不加私
勅考者也追而以正本可改矣

